

研究ノート：

「仮装人物」の〈ナイコトモナイジャナイ〉

北岡 一道

(2009年1月30日受理)

1. はじめに

日本語の言語作品の土台となる、記号論的な言語系列を素描し、秋声「仮装人物」中の近接・近似の系列をすこしく指摘する。

2. 作品の言語系列

日本語の言語作品は、日本語の具体的な言語環境や、抽象的な言語構造のうえになりたち、それらが（一群の）おおきなく制約条件〉になる。たとえば、童謡などでは、日本語の音節構造（あるいはモーラ構造）が基本的な制約となる。このことは、普通に言語作品に接する状況ではあまり〈制約〉と感ぜられない。しかし、海外の童謡を歌おうとするとき、あるいは、その外国語の童謡を日本語に訳して、歌にするときなどは、はっきりと、それぞれの言語環境・構造の制約性を感じるようになる。

抽象的な言語構造は、たとえば、ネーティブの文法直観と同一視される。この言語直観は、普通の話者のばあい言語活動をささえるのと同様に、言語作品の作者が、作品の生産過程をささえつづけるだろう。（ただし、音声言語と文字（あるいは特殊な階級となった〈書記者〉の符丁）の乖離がある状況・時代にあつては、作品の制作過程をつつみこむとはいいがたいかもしれない。）このばあい、小説に関して〈小説性〉といったいいかたが（あまり熟していないが）されることがあるが、小説家が作品をつくりあげる工程で、はたらく〈文法性直観〉と同様、〈小説性直観〉としてはたらくと考えることもできる。

日本語の言語構造として、物語や小説の視点と、

すぐにかかわるものに、〈心理動詞〉（および類例の構文）がある。たとえば、〈-たい〉といういいかたは、主語が〈1人称〉を典型としてあらわれ、〈2人称〉や〈3人称〉では非文と判断されるのが〈ふつう〉である。（いくつか条件がある。）

〈1〉（わたしは）おにぎりが食べたい。

*かれは、おにぎりが食べたい。

〈2〉*（わたしは）おにぎりを食べたがっている。

かれは、おにぎりを食べたがっている。

〈3〉*（わたしは）おにぎりが食べたがっている。

*かれは、おにぎりが食べたがっている。

ごくふつうの（日常的な）用法の希求表現であるが、主語の人称性に限定がある。このため、（この範囲で）人称をあいまいにしたままつかうことは、できない。また、代替的な〈たがっている〉では〈他人のようす〉としてしか解釈されず、かれの希求のなかみ、あるいはかれの視点にふみこむ表現にはならない。

こうした抽象的な（言語記号の具体物でない）言語にかかわる現象が〈言語構造〉の名をもってよばれ、ふつうには〈文法〉、〈語法〉などといわれる知識領域をなしている。（ことばとして対応的な〈文学〉、〈語学〉は、まったくべつの領域をなしているが。）〈-たい〉にかかわる、うへの例でみたように、合文法的／非文法的な用法の提示は、近年の文法学の基本的な方法（の一部）になっていて、日本人ネーティブからは（ふつうに聞かれず）意味のない非文の羅列もおこなわれる。

しかし、日本語を外国語としてまなぶ外国人にとって、あたえられた文の〈合非〉の判定もむづかしく、非文（へんな文）をいったり、かいたりしてしまう。そこでは、文の〈合非〉の判定、あるいは〈非文〉の適当な訂正が大切な仕事になる。近年の文法学は非文（つまり〈合非〉の境界）をおしえてくれるような内容を整備しつつある。が、特定の言語を背景とする外国人が、どのような項目を理解しにくい、あるいは、まちがえやすいかを教えてくれない。これをおしえてくれるのが、言語（基本は2言語間）の対照研究である。（うへの心理動詞（類例）構文の問題も、発想の基本は（おおく）欧米系の日本語学習者にとって、理解・教授しにくいという経験からはじまっている。）

そこで、日本語の言語特徴として〈一致、性、数、人称などが無い（：形式的な文法現象としては）〉といわれることがある。（これは、ヨーロッパ系言語に（古典語では完全に、近代語ではおおく）その現象がみられることからくる、対比の意識であろう。（ヨーロッパ言語として、その地方諸語のなかでも圧倒的に優勢な、ヨーロッパのなかの印欧語群をかんがえる。）したがって、模範となる言語、言語学が他の地域に由来していれば、日本語について、べつの言語特徴が指摘されることであろう。）

ヨーロッパ系言語では（伝統的に）名詞系列の曲用（屈折語尾変化）の変化カテゴリーは〈性、数、格〉であり、言語の核である〈オノマ〉に深くくみこまれている。このカテゴリーはその他のおおくの（文法に限らず）言語現象に浸透している。

現在、日本人学習者のおおくが、はじめて学ぶ外国語は〈英語〉となっている。が、英語は、その歴史的経緯のなかで、おおくの曲用特徴をすてており、ヨーロッパ諸言語のなかでは特異な存在である。すくないながらも英語に残存する〈性、数、格〉現象は比較的、堅固で基礎的である。〈一致〉は（ふつう〈一致〉として問題になるのは）この形態素にかかわる〈性、数、格〉現象をもとにした構文（ないし形態素間）現象である。

<4> I have a pen.
This is a pen.

ここで、〈I〉は、語彙的な意味は〈わたし（自称）〉であるが、文法的には（あるいは、そのもつ文法的意味は）、〈性／指定なし〉〈数／単数〉〈格／主格〉をしめしている。動詞語彙要素〈have〉も動詞のいくつかのカテゴリーとともに〈数／（自称・）単数〉をしめしている。（つぎの文で、〈This〉や〈is〉にも、似た文法カテゴリーが指摘できる。）

この2つの単語に共通して〈人称／自称〉と〈数／単数〉というカテゴリーがあらわれている。これが〈一致〉であった。（つぎの文では、〈人称／他称〉と〈数／単数〉をもとに〈一致〉があらわれている。）他の種類の一致もあるが、これが〈主語－述語〉の一致であり、一般に、英語では〈主語－述語〉が出現する文表現で、くりかえし随伴する連関である。英語の文のかたちは典型的に〈主語／動詞（述語）／目的語〉と、される。英語の文内一致はそのうちの〈主語／動詞（述語）〉にかかわる現象である。

いいかえると一致は（単）文のなかで、同一（文法）カテゴリーが連関的に2回あらわれる現象である。1文に〈主語／述語〉関係が（原則的に）かならずあらわれるのであるから、1文のなかで、一致が（原則的に）かならずあらわれる、ことになる。一致は（文内で）必然の連関をなすことになる。談話（ディスコースないしテキスト）が（原則的に）文の連続（文－文－文…）であるとかがえられるので、談話をつらぬいて、一致が必然の系列をなすことになる。

ところが、その日本語相当表現をかんがえると：

<5> （わたしは）ペンをもっている。
これはペンだ。

<6> ペンならあるよ。（表現論的改変版）
これ、ペンね。（同上）

ここで〈5〉では、〈わたし〉には、〈I〉とちがひ、文法カテゴリーとしては、〈性／指定なし〉〈数／単数〉〈格／主格〉といった要素が（はいって）ない。〈もっている？もつ〉にも、類例のカテゴリー要素はない。したが

って、英語のようなカテゴリー間の連関である文内一致もない。

<1>-<3>で、みた日本語の心理動詞（と類例の）構文では、<主語>と<述語>に、人称語彙（<わたし>、<かれ>など）にかかわる制約がある。これも、<人称>（文法カテゴリーとすべきか、どうか？）にかかわる<主述>の<一致>の一種とみることができる。が、特定語彙（グループ）に関する現象であり、したがって、文内において、かならずあらわれる連関といえず、必然の系列を（一般的には）なしえない。（そもそも日本語については、<主語/述語>（連関）の概念の適応妥当性の問題が古典的に存在する。）

<人称>は（文法カテゴリーにせよ、語彙的意味にせよ）、基本的に<話者>からみた分類表現である。<話者>なるヒトをしめす<1人称>、<話者>がものをいう先の<2人称>、それ以外の<3人称>である。（言語によっては4人称、5人称といってよい組織をそなえたものもある。）

人称は発話の方向性という、発話依存的な表現組織だが、この拡大概念として、<話者>からみた社会関係、時間関係、空間関係の分類表現は<ダイクシス（直示-表現）>といわれる。たとえば、時間として<現在（いま）><過去（かつて）><未来（いまからさき）>などがあるが、<ダイクシス>としては、とくに文法化されたもの、閉鎖的語彙組織が問題になる。

ダイクシスは（むしろ開放系語彙による指示の意味でなく）典型的に閉鎖的組織にあらわれる。話者とは、つまり<自己>のことで、ダイクシスとは自己の時空間のシルシ、あるいは主張の表現といえる。対立する<話し相手>（<話し手>にたいし<話され手>が、熟した表現であればよいが、<聞き手>も不正確。）その<話し相手>にも、当然、ダイクシスによってささえられる<自己の時空組織>がある。

例文において<人称ダイクシス>をたしかめよう。

<4> I have a pen.

<7> I ->1人称

have ->1人称

（さらに現在=時間ダイクシス）

a pen ->3人称（itに対応）

この<4>の1文のなかに3つの人称ダイクシスがあらわれている。英語の言語類型をしめす基本文型をこの例文のように、SVOとすると、この文型の文があらわれるたびに（すくなくとも）3つの人称ダイクシスがあらわれる。おおざっぱには、ごくふつうの文がでてくるたびに3つの自己時空間の主張がなされることになる。これは文法的に必然の系列であり、その主張を回避する言語表現は（原則的に）存在しない。（<格、数、性>などのカテゴリーはダイクシス的でない、とされる。）

これにたいし、日本語では：

<5> （わたしは）ペンをもっている。

<8> わたし（は） ->?1人称

ペン（を） ->?3人称

もっ（ている）->??人称

（さらに現在（未完了相）?）

文法カテゴリーとしての<人称>は十全にはみとめられていない。（対立説がある。）また日本の活用語の組織の言語的意味は時間的なものとしては、基本的に<時制的（テンス）>でなく<相的（アスペクト）>である、とされる。両者のうち、時制はダイクシスであるが、相はことなる。つまり（文法的には）典型的に時間的ダイクシスが存在しない。したがって日本語基本文中には、文法カテゴリーとして、<必然的なダイクシス>が存在しない。

文章は<文-文-文…>とすすむ。ダイクシスが（文法的に）必然の系列をなす英語などでは、<話者>あるいは<自己の視点>が、典型的には、単文ごとに2回出現する。（複文であってもSVOの骨格部分で、同様。）こうしてダイクシスつまり話者の自己時空間の主張が談話とともに、かぎりなく進行していく。

ところが、日本語では、必然的な（文法カテゴ

リーとしては) 系列としての話者の自己自空間の主張が、基本的にない。日本文では、開放系(ないし半開放系)要素によって、随意に表現されるにとどまる。(強制要素である<I>相当の<わたし>なども、随意である以上に、現実的な発話では<わたしは>と表現されることはむしろまれである。<わたしは>といういいかたは、文体的につよいマーキングがあるであろう。)

心理動詞と類例の語彙として：

<9> …ガほしい／…ヲのぞむ、欲する
…ガすき(だ)／…ヲすく、このむ
…ガわかる／…ヲ理解する

といったものがある。前者の系列が後者の系列にくらべ、(明確にわかれるわけでないが)より口語的で(その意味で)一般的である。逆に後者は文章語ないし文語表現であろう。日本人のこどもは、ふつうに、<このオモチャがすき。>といい、<わたしはこのオモチャをこのむ。>とはいわないだろう。前者系列は、<…ハ…ガ>のかたちでつかわれ、典型的には(意味的に)自称主語となるが、それも省略(不出現)が一般的である。ここでは、心理表現を直接になう語群が、文型や一致と関連し、ダイクシスなどの話者視点を表現する事例をみた。

3. 「仮装人物」の近似と近接系列若干

作品は、ひとつには、まず作者が登場人物に名前をあたえることから始まる。読者側からしても、(挿絵や人物関係図がとくにくわしくないかぎり)人物は、それぞれの<人物名>のもとに記述が理解され、全体の情景も個人の心のうちも想像される。

主要登場人物はたとえば、事実性のたかいモデル小説で、そのモデルはだれだれと同定されている。

<1> 稲村 庸三 <- 徳田 秋声(作家本人)
梢 葉子 <- 山田 順子(作家の

女弟子、第1の女性)

狭山 小夜子 <- 柘植 そよ(第2の女性)
徳田 加世子 <- 徳田 はま(作家の妻、なくなる)
山路 草葉 <- 竹久 夢路
松川 <- 増川 才吉
秋本 <- 村田 光烈
マルクスボーイ、園田 <- 井本 威夫

ここで、左の列は、作品中の人物名で、右はモデルとなった人物の本名、ないし通り名(ペンネーム)などである。これらの人物名のなかでも、フルネームのあたえられているのは、とくに中心になる人物。そのほかは、やや脇となるひとたちである。

そこで中心人物たちの、したの名であるが：

<2> 庸三 Yozo <- 秋風
葉子 Yoko <- 順子
小夜子 Sayoko <- そよ
加世子 Kayoko <- はま
(草葉 Soyo <- 夢路)

登場人物名の<葉子(Yoko)>を基本として、大変、にたかたちになっている。あたかも、曲用における語形変化系列のように、近似(類似)の連鎖列をなしている。(本名のほうは当然そうでない。)

近似性と変化の観点からならべかえると：

<3> 葉子Yoko-> 加世子Kayoko->
小夜子Sayoko
葉子Yoko-> 庸三Yozo
(庸三Yozo->*Zoyo-> 草葉Soyo)

となるであろう。もとの名が(あまり)にいていないのに、近似している(近似させている)そのことによって、指示対象の近似性が暗示される。(曲用や活用の変化系列のばあい、形態変化による文法カテゴリーの微小変化とともに、その中心形態

素との同一性が保証される。)

ここで<葉子Yoko->加世子Kayoko->小夜子Sayoko>の系列は、<現在-過去-未来>を中心に主人公(ないし作者本人)をめぐる女性たちのグループである。<葉子Yoko->庸三Yozo>の系列はこの恋愛(?)物語の主人公となる男女のグループである。音韻倒置のようなく庸三Yozo->*Zoyo->草葉Soyo>の系列は男同志の<葉子Yoko>をめぐる恋がたきとなっている。一種の変化系列とみると<葉子Yoko>がもとのかたち(語根にちかいもの)、その<葉子Yoko>に<加世子Kayoko>や<庸三Yozo>はべつの枝で最隣接することになる。(このことは作品の中心はやはり<葉子Yoko>であることをしめすようにみえる。「仮装人物」では冒頭で、自分と事件をえがくつもりだ、といっているが。)

作品では、ときどきにた(あるいは同一の)表現が、たがいに近いところに集中的にあらわれることがある。

<4> (『昭和文学全集』692ぺ上、原文12行。)

葉子はデパートから買って…コーヒ沸しのレトルトをもって…コーヒを沸した。…独逸(ドイツ;ルビ)から沢山…デパートにも出て…別にハムやコンピイフ、林檎(りんご)、オレンジなどの食料品…瓦斯(ガス)ストオブをたきながら…アパートを管理している…

<5> (同、692-3ぺ、原文9行。葉子のことば。)

つい秘密がたもて<なく>なってしまったんです…悪くは<くない>訳じゃ<くない>?…ただこうとは思わ<くない>の。…お失いになら<くない>限度で…私のお採りになって戴け<くない>ことも<くない>じゃ<くない>かと、そう思ったの。可(い)け<くない>。

ここで<4>は、外来語ないしカタカナことばが近接箇所集中してでてくる。ここの12回、10種のカタカナことばは、1つ(ドイツ)の例外を

のぞき(ほぼ)英語である。このカタカナことばは、すべて具体物で、ほぼ食べ物(食生活)と住みか(住生活)に関係している。このなかで:

- <6> デパート-アパート(建物)
- レトルト-ストオブ(加熱道具)
- ハム-コンピイフ(肉類)
- (林檎-オレンジ(果物))

といった対(対句?)が指摘できる。散文でありながら詩的な連想構造をもった筆遣いになっているようにみえる。食生活からも住生活からも和語はしめだされている。

また<5>では、おなじ<くない>が9回(〈なく〉のかたちも)近接して、でてくる。葉子のことばの、一貫した特徴というわけでもなく、この箇所での特異な状態になっている。うえの例ではわかりやすく<くない>にカギカッコをつけて、連鎖の特徴をしめした。意味の点でいうと、それぞれの<くない>が修飾していく相手の語句はちがい、たんなる<くない>のくりかえしでなく、それぞれが有意味ではある。しかし<くない>の(なぜか?)異常な羅列全体は一貫した否定的態度といった印象をあたえるだろう。おなじ<5>で、べつの観点としては、<くない>ともかさなる<な音>の集積も指摘できるだろう。

「仮装人物」のなかで、たとえば、<虚構>といった言葉とそれに近接してあらわれやすい表現をしらべてみる。<虚構>そのものはみつけにくいようだが、にた(意味が近似した)単語、表現は作中に遍在(かなりおおく散在)する。ほぼ<虚構>といえる、いいかえられる表現を若干ひろってみると:

- <7> 作品-小説-応募作品(具体的作品)
- 文学-文学道-小説道-葉子の文学(抽象、集会的)
- 恋愛小説-モオパサンの小説-外国の作品(やや特殊化)

- <8> 口実-芝居じみたこと-想念の花-粉飾(うそごと)

幻想-粉飾-歪曲（事実とちがうこと）

<9> 短いもの-勤労（作家自身の作家活動を
さして）

などがある。

そこで、まず典型的に<虚構>に意味がちかいは
のは<7>の第1系列、第2系列であろう。とく
に<作品>といういいかたがおおい。

<10>（同、563ぺ、上）

作品も何（ど）うせ、…くらいに思って…格に
はまらない…通読はしなかったが、…

<11>（同、563ぺ、上）

躊躇なく作品を否定してしまった。

<12>（同、693ぺ、中）

作品は好いのだが、…柄がわるいし、…不向き
かも知れない。

ここで<作品>に<主述>の関係をとおして、共同している要素として<ない>あるいは
<否定>ということばが目につく。<10><11>
では問題となる<作品>を悪くいっているが、
<12>ではそれほどでもない。

<作品>という語が<応募作品>とながなくな
った例では：

<13>（同、693ぺ、上）

庸三は応募作品を一つ一つ…文壇人には手のと
どかないものも…彼も興味を唆られた。

この例でも、ここでは明らかに褒めたいいかた
であるが、ちかくに<ない>があらわれている。
<応募作品>と<ない>は、<応募作品に>を間
接目的として（実際にはない語句だが）<手がと
どか／ない>が熟した動詞句として関係している。

このように<7>第1列のようなことは第2列
でもあてはまるようだ。

<14>（同、693ぺ、中）

小説道への精進もくじけたと…手には支えきれ
なかった。

ここで<くじけた>という否定的意味の語のあ
とに、さらに、<ない=なかった>があらわれて
いる。また：

<15>（同、563ぺ、上）

文学道に踏みだすことは…家庭を破壊すること
になりはしないか、…

ここでも、ちかくに<ない>がある。問題とな
る、<文学道>と意味的に関連しているが、主語
述語、あるいは動詞目的語といった関係にはない。
さらに：

<16>（同、562ぺ、下）

そぐわない雰囲気…。…長い小説の原稿をもっ
て…来た。

<17>（同、563ぺ、中）

仕方なく原稿はそれまで預かる

この例では<原稿>ということばがでてい
るが、<16>ではちかいが、前文で<ない>があら
われ、<17>でも、隣接して<ない=なく>があら
われている。が<仕方なく>と<原稿>に先行
し、動詞にかかる、<副詞相当語句>となってい
る。

<7>の第1と第2の系列には、<ない>ある
いは<否定的ないいかた>が近接するといえそう
だ。ただし第3の<外国の作品>などにはあては
まらない。

「仮装人物」の<虚構>相当表現と、<ない>

あるいは〈否定〉の連関は比較的、つよい。意味、意識の問題ともいえるかもしれない。〈ない〉ということが、秋声個人の〈虚構〉にかかわる線形スキームの1つの優性なデフォルト値なのであろう。

では、〈おおくの作品〉が登場する場面では、その近辺は、どうなるのだろうか。

<18> (同、692ぺ、中)

やがて応募作品が十編二十編と…持ち込まれて来た。

これから8行をこえて、さきの〈5〉の葉子のことばがはじまる。

「……悪くは〈ない〉訳じゃ〈ない〉？…ただこうとは思わ〈ない〉の。…お失いになら〈ない〉限度で…私のお採りになって戴け〈ない〉ことも〈ない〉じゃ〈ない〉かと、そう思ったの。可 (い) け〈ない〉。」

<参考文献>

- 1) 徳田秋声記念館企画展示室「徳田秋声記念館ガイドペーパー」(平成20年5月11日-9月7日)金沢文化振興財団・徳田秋声記念館 (08)
- 2) 和座幸子『ふるさとの文学者小伝、徳田秋声』金沢文化振興財団・徳田秋風記念館 (08)
- 3) 島崎藤村、徳田秋声ほか『昭和文学全集』第25巻、小学館 (88)
- 4) Li-fen Chen Fictionality and Reality in Narrative Discourse: A Reading of Four Contemporary Taiwanese Writers Dissertation. com. (08)

<付 記>

徳田秋声関係資料についてご教示いただいた、仁愛女子短期大学図書館職員のかたがた、徳田秋声記念館(石川県金沢市東山;〈ひがし茶屋街〉)職員のかた、旧徳田秋声宅(東京都文京区森川町;〈赤門まえ〉)のご関係のかた(ご家族)、金沢文化圏についてご示唆いただいた仁愛女子短期大学の学生のかたがたにお礼もうしあげます。